



金子孝信《日劇前》1936年

2025年度企画展のご紹介 1

■徳川十五代将軍の甲冑が一堂に！

「久能山東照宮」をご存じですか？「東照宮」といえば、まず日光東照宮を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。先に久能山東照宮を思い浮かべる人は、ツウといえるかもしれません。

徳川家康は逝去後すぐに久能山に埋葬され、翌年久能山東照宮が創建。家康に朝廷より東照大権現の神号が贈られました。日光東照宮も同じ頃の創建ですが、創祀とされるのは久能山東照宮です。そして久能山東照宮は、平成22(2010)年にはその本殿・石の間・拝殿が国宝に指定されています。付属する博物館には、家康所用の甲冑や晩年の手沢品、徳川歴代将軍の武具、直筆の書画など、奉納された徳川家にまつわる宝物2000点以上が収蔵されています。

本展では、こうした貴重な宝物の中から、国宝2点・重要文化財7件31点を含む選りすぐりの名品の数々を一堂に展示します。特に、重要文化財である家康所用の甲冑2領——家康が関ヶ原・大坂の陣で用いたという《齒染具足》(前期展示)と、金色に輝く《金陀美具足》(後期展示)——をはじめとした歴代十五代将軍全ての甲冑の展示は、迫力のあるものとなるでしょう。それぞれの将軍の美意識や体格、時代の変化などを楽しめる大きな見どころとなります。

その他にも、本殿に吊るされていた《釣燈籠》(国

枯木貞因
江戸時代前期(17世紀)
徳川家光筆

※すべて久能山東照宮博物館蔵

重要文化財 洋時計
1573年製

久能山東照宮 社殿外観

宝／前期展示)や、創建時に奉納された名刀《真恒》(国宝／前期展示)、家康の愛刀《ソハヤノツルキ》(重要文化財／後期展示)、家康愛用の茶道具の数々(重要文化財／それぞれ半期展示)、また歴代将軍の書画も展示紹介します。

徳川将軍家の美術工芸品を通して、江戸時代の武家文化の精髓をお楽しみください。

(専門学芸員 宮下 東子)

重要文化財 金陀美具足(後期展示)
桃山～江戸時代初期(16～17世紀)

「徳川十五代将軍展 ～国宝・久能山東照宮の名宝～」
6月27日(金)～8月24日(日) [前期:～7月21日(月)、後期:7月23日(水)～]

※料金、休館日等の詳細は館HPをご覧ください。

2025年度企画展のご紹介 2

■史上初のオバケ万博が開幕！

皆さん、「オバケ」はお好きでしょうか。「大好き！」とはいかなくとも、「怖いけど、ちょっと気になる」という方は多いのでは？

古今東西、オバケは物語で語られ、絵画に描かれ、演劇や映画の題材にもなってきました。けれども、そもそもオバケとは何なのか。地域によって、国によって、時代によって、個人によって、そのイメージはさまざま。とてもひと言では説明できそうにありません。そんな意味も含めて、展覧会タイトルには「オバケ」のあとに「？」がついているのです。

そんなオバケそのものを展示することはできないわけですが、会場には絵本、漫画、アニメーション、落語、音楽など、様々な角度からオバケという存在に迫るためのモノが並びます。世界各国のオ

オバケ湯 祖父江慎
PLAY MUSEUMでの展示風景 (入口撮影: 田附勝)『ねないこだれだ』と
春風亭一之輔による「オバケ落語」
©Keiko Sena『ねないこだれだ』
1969年(福音館書店)
作:アネット・チゾン、タラス・テイラー
作・絵:せなけいこ『おぼけのバーバパパ』1972年(偕成社)
作:アネット・チゾン、タラス・テイラー
訳:やましたはるお

「オバケ？」展

9月13日(土)～12月7日(日)

※料金、休館日等の詳細は館HPをご覧ください。

古今東西のオバケ絵本500冊 選・広松由希子(絵本家)
PLAY MUSEUMでの展示風景 (撮影: 田附勝)

バケ絵本500冊が並び、書棚の前でゆっくり読書を楽しむもよし、オバケを探求する「オバケ研究所」で新たなひらめきを得るもよし、オバケをテーマにした銭湯「オバケ湯」(注:本物のお風呂ではありません)で遊ぶもよし。大人も子どもも色々な楽しみ方のできる体験型の展覧会です。

おどろおどろしい存在のみならず、例えばふとした時に感じる何かの気配、絶対にそこに置いたはずなのに消えている失くし物、自分でもびっくりの思いもよらない大失敗……説明のつかない身の回りの不可解な現象も、もしかするとオバケのしわざかもしれません。オバケに限らず、この世の不思議にご興味のある方々、見どころ満載の本展へ、ぜひお越しください！

(専門学芸員 池田 珠緒)

教育普及事業のご案内

■親子で美術館にお越しください
—「みちくさプレイス」と「親子ふれあいデー」—

昨年の11月、美術館のロビーに「みちくさプレイス」がオープンしました。

子どもから大人まで、ご来館の皆さまに自由にくつろいでいただく場所です。作品鑑賞やイベントの前後に気軽に立ち寄っていただきたい、という思いを「みちくさ」という言葉に込めました。特に、「美術館はハードルが高い」と感じている小さなお子さま連れの方を意識し、楽しい時間を過ごしていただけるよう、絵本やパズルも用意しました。



オープンして4か月、特に人気なのは「なににみえる？」カードです。不思議な形に絵をかきたすことのできるカードで、子ども用に、と考えて作りましたが、気合の入った大人の作品もちらほら。ホワイトボードに貼られた力作を眺めながら、

編集部からのひとこと

大盛況のジブリ展にはじまり、冬の「皇室の名宝と新潟」では伊藤若冲の《動植綵絵》が展示されるなど、2024年度は様々な企画展を楽しんでいた1年でした。また、当館では企画展観覧当日に限り、コレクション展が無料でご覧いただけるようになりました。新収蔵品もご紹介する機会がありますので、ぜひ合わせてご覧ください。(専門学芸員 池田 珠緒)

親子で盛り上がってくださったのかな、と想像しています。絵本やおもちゃ、そして大人に人気のアート系絵本も少しずつ増やしていきますので、ぜひお立ち寄り下さい。もちろん、大人だけの利用も大歓迎です。

もう一つ、お子さま連れの皆さんにぜひご利用いただきたいのが「親子ふれあいデー」。親子で来館した保護者のコレクション展観覧料が無料になる日です(*子どもは中学生以下 *子ども1人につき保護者2人まで)。もともと近代美術館では中学生以下は観覧料無料(知っていましたか?)なので、この日は親子そろってコレクション展を無料で観覧できるのです。

また、「親子ふれあいデー」では、声の大きさを気にせず鑑賞をお楽しみいただける「おしゃべりタイム」を終日実施しています。小さなお子さま連れでも気兼ねせず作品を鑑賞いただけるのではないかと思います。各月に1日ずつ設定していますので、実施日は美術館HPなどでご確認ください。

(学芸企画課長 今井 有)



新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第58号

編集・発行 THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14

TEL0258-28-4111代 FAX0258-28-4115

https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/

X @niigata_kinbi Instagram niigata_kinbi

制作・印刷 株式会社 滝沢印刷

〒940-2023 新潟県長岡市蓮蓬1丁目1-36

リデザイン (2019年 第52号～) 長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大

発行日 2025年4月22日

特集1

2024年度あれこれ1

■「日本が見たドニ | ドニの見た日本」を開催して

昨秋「日本が見たドニ | ドニの見た日本」を久留米市美術館との共同企画で開催しました。その後、新たに分かったことなどを二、三書き留めておきたいと思います。

展覧会最終日の前日、モーリス・ドニ総目録編集集のファビエンヌ・スタールさんがフランスから来館されました。その機に合わせて、国内のナビ派研究者が幾人か展覧会視察を兼ねて来訪され、鑑賞の間には当館の小さな会議室でお茶を片手に日仏の研究者が語り合う時間がありました。最新のドニ研究の一端が披瀝される光景はさながら、親密でしかも知的興奮を覚えさせる即興のシンポジウムのようなものでした。

ドニの観た歌劇

総目録が刊行される日も遠くないということで、ドニの絵画作品に関する膨大な文献情報や視覚的データが既に緻密に整理された状態であることを、クラウド上のアーカイブにアクセスしながら、スタールさんが説明してくださいました。そして今回ドニ展に出品されていた作品についても、いくつか分かったことがありました。《アルミードの園》(1907年 富士屋ホテル)は古色を帯びた額縁におさめられた100号の大作です(図1左)。1908年のドルエ画廊における個展の写真を確認すると、まさにその額に入った状態で作品が写っていました。ドニが見ていた時と同じ姿で私たちも見ているという共時的現象に、胸が高鳴った瞬間です。

また、この作品の主題の源泉についても、確かな手がかりを頂きました。アルミードとルノーの悲恋のエピソードは、トルクァト・タッソの叙事詩「エルサレム解放」がその大元にあることは明白ですが、この文学作品に由来する歌劇や絵画は数多く、図録の解説を書いた時点では、ドニの靈感源は特定できていませんでした。しかし、



その答えは彼自身の言葉の中にありました。

1905年6月、友人に宛てた書簡で、ドニはグルック作曲のオペラ『アルミード』を鑑賞して深い感興を覚えたことを語っています。「私はアルミードの神話に夢中になっています」と。音楽だけでなく、舞踊や装飾や数々の魅力的な細部、庭園の場面が特に素晴らしかったことにも言及していました。パリのオペラ座で上演された歌劇をドニが隔々まで貪るように見つめていたことがわかります。その手紙を受け取った人物、ベルト・ド・ラ・ロランシ夫人(Berthe de la Laurencie 1876-1913)は作曲家ヴァンサン・ダンディの娘で、ドニが深い親愛の情を抱いていた婦人でした。ドニが彼女に宛てた書簡はモーリス・ドニ美術館が所蔵しており、イヴリヌ県立史料館のウェブサイトで公開されているので閲覧が可能です。力に満ちたドニの筆跡を目でたどる喜びは格別であり、またドニが《アルミードの園》という作品をどのように着想し、細部まで掘り下げて主題を解釈したのかは、興味の尽きないテーマです。

後半生に光をあてる

今回、展示を構成する上で心がけたことがありました。ドニの後半生の活動を浮き彫りにすることです。モーリス・ドニという作家が紹介される際には、つねに「ナビ派の」という冠がつけられます。しかし19世紀末のパリで結成された「ナビ派」の前衛グループとしての活動期間は約10年という短いものでした。ドニ個人としては、いわゆる前衛美術史から姿を消した後の40年間をどう生きたかということが、むしろより重要だと考えることもできます。この時期にこそ、子どもの頃から思い描いていた宗教画家になる夢を実現させ、後進を指導し、建築の装飾画

の分野において豊かな作品を残しました。

人生後半の活動を象徴する作品として、当館の《ベンガル虎 バッカス祭》(1920年)を選び、展覧会の一つの頂点となるように全体を構成しました。国内美術館所蔵のドニ作品としては最大のサイズであり、妻マルトを亡くした翌年という人生の転機となった時期に制作された作品です。過去の所蔵家によって切断されるという数奇な運命をたどりましたが、この機会に本来の輝きを取り戻させたいと願い、広々とした空間でゆったりと眺められるように配置しました。幸いにも同構図の油彩画であるもう一つの《バッカス祭》(1920年 アーティゾン美術館)をお借りすることができ、隣り合う壁面に2点を飾ることができました(図2)。

様々な試みを積み重ねて、ドニ後半生の画業に少しでも光をあてることができたのかどうか。それはまだ今の時点では何ともいえません。ただ、会期中、バッカスの前に置かれたソファに深く腰を下ろして、静かに作品を見つめている来場者の後ろ姿を見かけることができました。担当として非常に嬉しかったことはいうまでもありません。

日本人コレクターとの縁

最後に、ある日本人コレクターとドニにまつわる、ささやかなエピソードを紹介します。先述したアーティゾン美術館の《バッカス祭》は1921年のパリでの個展に出品された後、政治家木内重四郎(1866-1925)が購入して、日本に将来したものです。木内は京都府知事を務めたこともある人物ですが、府知事時代に豊臣秀吉関係の史跡の保存に力を入れたことでも知られています。それは日露戦後の帝国主義と深い関係があり、日本人の海外進出

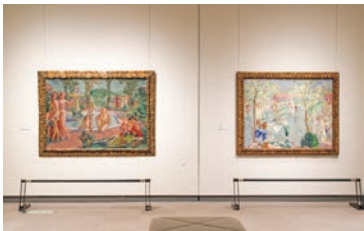


図1

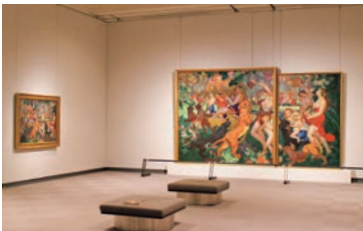


図2

時の趨勢と、国際色豊かだった秀吉の時代とを重ね合わせて顕彰するという、政治的な意図でもあったようです。安土桃山時代の文化財保存が奨励される中で、大正期の南蛮趣味流行とも相まって、京都市内ではキリシタン墓碑の発見が相次ぎ、話題を呼びました。そこから刺激を受けて、1920年には大阪府茨木の山間部でも墓碑が発見され、事態を大きく動かす出来事となりました。その後調査がすすむにつれ、史跡だけではなく信者が見出され、信仰そのものが存続していたことが確認されて、国内外をゆるがすニュースとなったのです。

図録の拙エッセイでは、ドニが1924年1月1日の日記の中で「最近発見された日本のキリシタンの集落」の話題に触れていることを取り上げました。それはこの大阪の集落である可能性が高いと思われます。ドニは地名には言及していないため、確証ではありませんが、もしドニの関心を引いたキリシタン発見が大阪のことを指しており、その発見の起因が木内重四郎による史跡保存奨励だったとしたら、実に不思議な縁だといわざるを得ません。

(万代島美術館専門学芸員 平石 昌子)

参考文献
・「モーリス・ドニ美術館所蔵資料アーカイブ」(イヴリヌ県立史料館ウェブサイト)
https://archives.yvelines.fr/rechercher/archives-en-ligne/correspondances-du-musee-departemental-maurice-denis (最終閲覧:2025年3月17日)
・高木博志「大正期の文化・学術と茨木キリシタン遺物の発見」(マルタン・ノゲラ・ラモス／平岡隆二編「関西の隠れキリシタン発見—茨木山間部の信仰と遺物を追って」人文書院 2025年)

特集2

2024年度あれこれ2

■「ジブリパークとジブリ展」 4月17日(水)～6月9日(日)

2022年愛知県に開園した「ジブリパーク」の制作現場を指揮した宮崎吾朗監督のこれまでの仕事と作品を振り返る全国巡回展。ジブリパークでの各エリア順次開園にあわせ、展示内容の一部が新しくなったの開催でした。観覧者数は、当館歴代4位となる126,126人。「ネコバス」や「ジブリのなりきり名場面 再現展示」が人気で、土日祝日には入場制限も余儀なくされました。大型展時、来館者の方々が快適に展示をご覧いただけるよう、今後も模索していきます。

(主任学芸員 長嶋 圭哉)



■「生誕100年 山下清展 百年目の大回想」 6月29日(土)～8月18日(日)

2022年に生誕100年を迎えた放浪の画家・山下清(1922-1971)の回顧展を開催しました。代表作《長岡の花火》をはじめとする貼絵を中心に、幼少期の鉛筆画、油彩、水彩画、ペン画、陶磁器などの作品約190点により、百年目の節目に相応しい充実した展示となりました。展覧会初日の6月29日には山下清の甥である山下浩氏による講演会を開催、映画やドラマのイメージとは異なる、芸術家としての山下清の姿についてお話しいただきました。

(学芸企画課長 今井 有)



■「ワークショップ：親子でアート！『いつアート？ It's Art!』」 11月10日(日)

身の回りの、普段見過ごしている〈なんでもないもの〉に着目し、その美しさを見出す。長岡造形大学の小松佳代子教授とその研究室の学生さんたちによるカメラを使ったワークショップは、そんな内容でした。紙を巻いて覗き、風景を切り取ってみることから始まったこの活動。配られたカードにある「にねろにねろしい」などの不思議な言葉に合うモノを選び、組み合わせて撮影。写真アルバムを作り、〈アート〉を体験するまたとない機会となりました。

(専門学芸員 宮下 東子)



■「映画鑑賞会：『目の見えない白鳥さん、アートを見にいく』」 11月24日(日)

全盲の美術鑑賞家・白鳥建二さんとその友人たちの「アート鑑賞」を追ったドキュメンタリー映画を上映しました。「見る(観る)ってなんだろう?」「美術館ってどんな場所なんだろう?」ご参加の皆さんの中に、様々な問いが生まれたのではないのでしょうか。見逃した方は、本作の監督の一人でもある川内有緒さんの著書『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』(2022年、集英社)を是非どうぞ。

(学芸企画課長 今井 有)



特集3

2024年度新収蔵作品紹介

日本画家・金子孝信(1915～1942)は、新潟市の蒲原神社(当時の正式名称は五社神社)の宮司の家に生まれました。東京美術学校を優秀な成績で卒業し、新しい日本画表現を模索する気鋭の画家として将来を期待されましたが、程なく召集され、従軍先の中国湖北省で26歳の若さで戦死しました。その画業は、戦没画学生の手紙を掲げる無言館(長野県上田市)でかつて紹介され、2014年には新潟市美術館で本格的な回顧展を開催、新潟市潟東樋口記念美術館(新潟市西蒲区)には孝信作品が常設展示されています。

当館ではこのたび、作家遺族から孝信の遺作8点(本画4点、素描類4点)の寄贈を受けました。《銀座街頭》は電燈に照らされた夜の銀座を描いたもので、近代化する東京の都市風俗がしばしば孝信の画題に選ばれました。郷里新潟の親族等をモデルとする人物画もいくつか残されており、《子供達》には自らの妹や甥・姪、《子守り》には神社の境内に住む女性を描いています。《子守り》の背景には、神社周辺に広がっていた田園風景が洋画的描法で捉えられ、戦後の新しい新潟駅の建設で失われた往時の面影が偲ばれる点でも貴重な作品です。

(主任学芸員 長嶋 圭哉)



《銀座街頭》1936年



《子供達》1938年頃



《子守り》1938年頃

表紙の作品

1933年有楽町に開館した日本劇場(日劇)の前を闊歩する二人のモダンガールを描いた作品です。孝信の学生時代には、辛うじて東京の街に華やきが残っていました。日劇はその後、急速に戦時色を強め、孝信死去の翌年には巨大な兵士像の写真壁画「撃ちて止まむ」が外壁を覆うことになります。今年は太平洋戦争終結から80年。孝信の遺作を通して、あらためて平和について思いを巡らせたいと思います。

金子孝信〈日劇前〉1936年
(コレクション展「[新収蔵] 金子孝信とその時代」より)
4月8日(火)～6月9日(月)※料金、休館日等の詳細は館HPをご覧ください。

